
美夜星さん

ATURA

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美夜星さん

【Nコード】

N5320C

【作者名】

ATURA

【あらすじ】

それは悲しい物語。夜道で少女は少年に語る。少女は軽い気持ちで話し始めた。あの惨劇を・・・。

(前書き)

コメディーばっか書いてる僕ですが。
今回は暗く悲しい物語です。

ある夜、少女と少年が夜道を歩いていた。

「ねえ、美夜星^{みやはし}さんって、知ってる？」

少女が唐突にきいた。

「ううん、知らない」

少年が答える。

「じゃあ、教えてあげる、それは・・・」

ある一人の少女のお話・・・

私には、変な力があつた。

妖怪をけす力。

「きえろ」と思っただけで、妖怪達は消える・・・。

その時代は妖怪がいっぱいいて、

私の力は、大切だったらしい・・・。

私は偉いらしい大人達に連れて行かれて妖怪を退治していた。
悪い妖怪がいっぱいだから、私は仕方ないと思っていた。

来る日も来る日も「きえろ」「きえて」と念じて妖怪をけした。
妖怪達からは、悲しい気持ちや、怒りが伝わってきた。
でもけした、そうしろといわれたから・・・。

家族にも、友達にも、会えなかった、ずっと妖怪をけしていた・・・。

「もう、妖怪退治は終わりだ」

そう言ったのは、私の妖怪退治を手伝ってきた、坂部^{さかへ}さん。

終わった。

小学生の時から連れ出された私はもう中学生だった。

「終わった？・・・本当！？」

心から喜んだ、やっと家族に会える！友達と会える！

後日、私は家に帰れた、優しい父と母、兄に姉に弟。

みんなあで抱き合った、涙を流した。

友達とも再会した、

みんな変わってなかった、

また、一緒に遊んだ。

「どういうことだ！！」

電話で父が珍しく激怒していた。

「ゆるさんぞ！！そんなかってな！！」

だが相手は電話を切ってしまったようだ。

父は青ざめた顔をしてみんなを集めた。

「いいか、お前達、美与を守るんだ」

父から言われた言葉だ。

もちろん、美与とは私のことだ。

「ピンポン」

チャイムが鳴る、父は驚きつつ、怒りの顔で玄関を睨みつけた。

「私です！坂部です！美与ちゃんをすぐ逃がしてください！！」

私を・・・逃がす？

父は急いで玄関へ行き、扉を開いた。

そして坂部さんと話す。

「車は用意してあります！家族全員で逃げましょう！」

私達は車に乗った。

そして坂部さんは車を発進させる。

「なにが起きているの！」

母は心配してきく。

「美与を・・・殺すと・・・国会で決まった」

意味がわからなかった。

詳細は坂部さんが話した。

国会が美与ちゃんの力は危険だといった。

確かに、現れると念じると・・・妖怪は現れた。

そして、その事で、私は・・・妖怪とみなされた。

「しまった！先回りされていたか！！」

軍服の人たちがバーケードをつくり銃をこっちに向けていた。

「あぶない！！！」

あっけなく、あの人たちは撃ってきた。

車は止まった。

「坂部さん！！」

坂部さんは頭を打たれていた。

絶叫が聞こえた、その声は私だと気づいたのはかなり時間がかかった。

「外へ出る！」

父がドアを開き外へ出た。
家族全員で外へ出る。

「撃て！逃がすな！！」

容赦なく弾は襲ってくる。

「きゃああ！！」

姉が撃たれた。

足をやられたようだ。

「お姉ちゃん！！」

「私はいいから早く！！」

次の瞬間、姉は背中に何十発も弾丸を受けた。

「いやああああ！！！」

それから覚えていない。

父が私を抱き走って逃げたらしい。

起きた場所は友達の家だった。

「大丈夫？」

母がつきつきりだった。

私は泣いた、なぜ？なぜ？こんな目にあうの？

父の話でどうやら町の人々が私達を守ってくれるそうだった。

「子供達は安全なところへ隠そう！」

誰かの意見でみんな納得し、

子供は山に隠れる事にした。

だが、普通の町に、銃などあるはずもなく。
講義したものの、

「国のためだ」

などと言っては聞かなかった。

「妖怪はどこだ」

「妖怪ならうちの娘が全部けした！」

「その娘が妖怪だ」

「無実の人を殺しておきよく平気でいられるな！」

「この人殺しが！！！」

「だまれ！国のためだ！！！」

「違う！こんなのいいわけないだろ！」

結局あいては無視をして子供探しに力を入れた。

「山にいる模様です！！」

山にいた一人の子供が見つかったしまった。

「どこの山にみんなはいるかな？」

「だれが教えるもんか！知ってるんだぞ！この人殺し！」

少年は固く口を閉ざした・・・だが、
殴られ、蹴られ、拷問を受けた。

「早くいえ！このガキ！」

耐え切れず、仲間の一人が助けるため出てきた。

「あの、山です」

涙を流し、しきりに、ごめん、ごめん、と言っていた。

「火をつければ良いだろ」

偉そうな男が、探するのが大変だという問題に、冷酷に答えた。

「ですが、他の子供も・・・」

「かまわん、犠牲は付き物だ」

火を放たれた、

山には20人近くの子供が、

「どういうことだ！！」

「私の子がいるのよ！！」

「お前達は何を考えていやがる！！！」
親たちは嘆き悲しんだ。

「火が近づいてきたよ！！」

「俺らまで殺すのか！！」

子供達は絶望的だった。

「ごめん・・・ごめん・・・」

美与は泣いていた。

「仕方ないよ」

「美与は悪くないって」

子供達は円になった。

「みんな、ずっと一緒だよ」

美与は思った。

許せない・・・さんざん妖怪退治をさせて・・・許せない・・・。

「妖怪達、全部・・・現れろそして・・・二度と消える
な」

「そうして、子供達は全員死にました、最後に美与ちゃんの願いは

叶い、妖怪たちは現れ、悪い人たちを殺しました、っていう怪談、ハハハ、こんな話、作り物に決まって」

「ねえ、なんで美夜星さんって言うか……知ってる？」

少年はうつむきながら言った。

「え？……そういえばなんでかな？」

「……みんなのチーム名だよ、「美夜星探検隊」美しい夜の星で」

「チーム名？子供達の……結構詳しい設定だね」

少女は興味がなくなったようだ。

「……めん……め……ん……」

少年が何か言っている。

「どうしたの？」

「ごめんごめんごめんごめん」

少年は涙を流し目は焦点が合わず狂ったように言った。

「僕が……みんなの場所……言っちゃったんだ」

終わり

（後書き）

感想は結構です。

なにより、大切な事を感じていただければ、
なにか大切なものを身にしみていただければ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5320c/>

美夜星さん

2010年11月13日14時13分発行